

1 日本にボーイスカウト運動を伝えた人々

ボーイスカウトは現在(1980年)世界116カ国、1400万人もの多きに上っている。これは、キリスト教、仏教等の宗教活動を別にすれば、他に例をみない大規模なものである。そのボーイスカウト運動を日本に伝えたのは、誰であろうか。そしていつごろのことであったのであろうか。

イ、日本のあけぼの

日本に最初にボーイスカウト運動を伝えたのは、1908年(明治41年)、ロンドン駐在の秋月左都夫全権公使であった。

秋月公使は、日本政府への報告の中で、「ボーイスカウト運動は騎士道精神にのっけているが、特に日本武士道精神も取り入れている」と伝えた。これを受けた文部大臣牧野伸顕(第1次西園寺内閣)は、ロンドンで開かれる“万国道徳会議”に、日本代表として参加する、広島高等師範学校長、北条時敬にその調査を依頼したのであった。

北条はロンドンに着くと、想像以上のボーイスカウト旋風に驚き、この運動がなぜこんなに少年たちに歓迎されるのか、その原因を徹底的に調べることにし、パークヘッドやブラウンシー島等、ボーイスカウト運動が生まれるために関係のあった所にまでわざわざ足を運んで見学した。そしてその翌年の初夏、帰国する時には、ボーイスカウトに関する書物や、ユニフォーム、帽子、ネッカチーフ、笛、ロープ等、あらゆる訓練資材一式を日本に持ち帰った。

ところが不幸にも内閣が変わっていて、新文相(小松原英太郎)のいれる所とならなかつた。仕方なく北条は、広島高師はもとより、各地に出向いて、学校教師を対象にスカウト講演会や展示会を開き、そのすぐれた教育方法を力説してまわった。

同時に北条は、広島高師付属中学校の校外活動にスカウティングを取り入れ、明治42年4月、同中学校の寄宿舎に7個団のボーイスカウトを結成して、生徒の自治によるボーイスカウト活動を推進した。これが日本におけるこの運動の始まりであった。

彼は、大正2年に初代東北帝国大学総長、のち学習院院長に就任してからもボーイスカウトに関する講演等を続けて、その普及に努めた。

口、乃木大将と、創始者ベーデン・パウエル卿との出会い

著名な教育家・政治家が日本にボーイスカウト運動を紹介したほか、乃木希典・田中義一大将等、有名な軍人も、ボーイスカウト日本伝来には少からず貢献している。

明治44年6月(1911年)イギリス皇帝ジョージ5世の戴冠式に、東伏見宮依仁親王・同妃両殿下の随員として、東郷平八郎海軍大将と共に英国に渡った乃木大将は、ロンドンでスカウト集会を視察する機会に恵まれ、この運動を創始したベーデン・パウエル卿にも初めて面会した。

帰朝後、学習院長となった乃木大将は、イギリスで見学したボーイスカウトの印象を、多大の感激をもって学生に語っている。そして毎年夏行われていた学習院の遊泳会に、片瀬海岸の松原で初めて3週間の天幕生活をさせ、ボーイスカウトの訓練を試みたのであった。

このようにボーイスカウト運動は、有力な人々によって、いろいろな形でわが国に紹介されて来た。そして、各市町村にあった各種の既設少年団体は、ボーイスカウト教育法の研究が進むにつれて、従来の青年団に対する少年団といった団体から、独自の少年教育としての存在意義を持たなければならない、とおぼろ気ながら認識しはじめた。



真中に立てる和服の人が佐野常羽、昭和29年9月第10回指導者実修所の時山中野営場を訪れた、晩年の姿。

当時わが国には、明治維新前から存在していた子供たちの団体もあり、仏教・キリスト教の日曜学校を基礎とした少年団体もあり、指導者それぞれの工夫による少年団体等もあって、これら既存の少年団体に、ボーイスカウト運動は大きな影響を与

えつつ、揺りかごの時代が大正10年ころまで続いて行くことになる。

なお日本における初期のボーイスカウト運動、特に実技、指導者養成の面で功績のあった、少年団日本連盟顧問、佐野常羽を忘れることはできない。彼は、大正13年夏、デンマークのコペンハーゲンで開かれた、第2回世界ジャンボリーに参加すると共に、残って日本人として初めてギルウェル訓練所に入所し、少年部コースを受講し、帰国するや、第1回指導者訓練所の所長となり、以後実修所長を長く務め、わが国ボーイスカウト発展の基礎となる指導者養成に、多大の貢献をしたのである。

2 ベーデン・パウエル卿

イ、ブラウンシー島の実験キャンプ



パウエル卿が晩年まで着た服，ロンドンのベーデン・パウエルハウスに展示されているもの。

以上でボーイスカウト運動が、日本へいつごろ、どんな人によって伝えられたかについて述べたわけであるが、今度は、いよいよその運動を起こした、ベーデン・パウエル卿その人について、どのようにしてこの運動を起こすに到ったか、簡単に述べてみたいと思う。

1907年（明治40年）50歳の時、ベーデン・パウエル卿は、陸軍騎兵監の任期が満了となり、ノーザンバーランの防衛師団長という閑職についた。

人生50年、中將という位にも上り、ナイト勲爵士にも叙せられた今、後の半生をどう送ろうかと思案し、かねて彼が軍隊や戦争等を通じて体験した、青少年の訓練方法を完成して、一冊の本にまとめることを思いついた。そしてそのために、実際に青少年と共にキャンプしながら、自分の考えている訓練方法を実験に移してみることにしたのである。これが今日、「ブラウンシー島の実験キャンプ」と言われるもので、ボーイスカウト発祥のスタートを告げる号砲となったものである。

キャンプに選ばれた所が、ドーバー海峡にあるブラウンシー島の一角、ドルセットでパウエル卿の計画に従って実験に参加したのは21名の少年たちであった。ここでは、彼が軍隊に入ってから今日まで到る所で体験したもの、アフリカ原住民のすぐれた少年鍛練法、ローマ帝国時代のストア哲学者エピクトスの学説、スパルタ教育、日本の武士道精神までも取り入れられたという。

ロ、「スカウティング・フォアボーイズ」を刊行

実験キャンプを終えた、ベーデン・パウエル卿は、1908年（明治41年）1月28日、ロンドンに小さな事務所をかまえ、妹のアグネスを助手として、今日ボーイスカウ

トの原典と言われる、「スカウティング・フォアボーイズ」(少年のための斥候法)という本を執筆刊行した。

卿はその序文に力をこめて、次のように述べている。

「この本は少年に如何に世に生くべきか、ということをお教えしようとねら

ているもので、どうして食って行けるか、というようなことをねらっているのではない。

今までの学校教育は、どうすればよい成績が得られるか、どうすれば物知りになれるか、ということだけを教えこみ、そうしてよい月給取りになったり、よい職が得られたり、また権勢が得られるようにとしか教えていない。このような利己心が社会のすべての階層に教えこまれると、無えんりよで自己本位となり、他人と優越尊大を競う事となる。

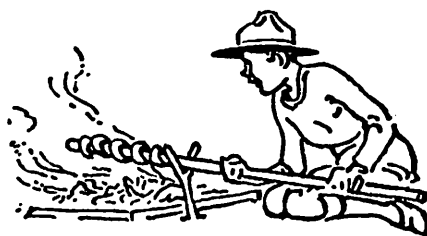
ボーイスカウト訓練の目的は「自己本位」から「社会奉仕」へ、精神・身体共に公に奉じ得るよう各人の能力を鍛えるのである。特にこの訓練法には軍事的な目的、または実習は含まない。人類同胞に対する奉仕の観念を育成するものである……」

つまりこの本の斥候とは、平和の斥候である。すなわち、他人に先んじて難に赴き、急を救い、苦しい時にも口笛を吹いてほほ笑む男の中の男であり、探検家、開拓者、発明家等を含めた先駆者のことである。イギリスは今、そういう男を要求している。そしてその訓練は、「大人になってから仕込んだのではもうおそい！少年の時からだ！」と烈々たる愛国の熱情をもって、世の人々に強く訴えたのである。

少年のスカウト姿を表紙に描いたこの一冊が、イギリス各地の書店に姿を現わすと、少年たちは書店に殺到した。少年だけでなく、少女たちまで先を争って買った。わずか72頁の小冊子であったが、新しい少年運動を世界に紹介したものとして、それは今で言うベストセラーとなったのである。

ハ、ボーイスカウト運動起こる

この本の発行をきっかけとして、イギリス各地では少年たちが自発的に班をつくり始めたのである。班ができたなら班長・次長をきめ、数個班ができたなら隊をつくる……スカウティング・フォアボーイズに書かれてあったことが少年たちに実践され始



ベーデン・パウエルは、絵も大変上手で、「スカウティング・フォアボーイズ」には自らかいたさし絵が多くおせられている。これも次の絵もその1つである。

めたのである。田舎に行ってもボーイスカウトの服装して、明かるい色のネッカチーフを首に巻き、大きな帽子をかぶったスカウトの姿をみかけるようになった。またボーイスカウトには団杖がいるというので、彼らはほうきの柄を団杖として用いたため、荒物屋から買いあさり、ために荒物屋の店頭からほうきが消えたというエピソードが残っている程である。

二、たちまち世界に広まる

ボーイスカウト運動は、海を隔てて遠く日本にも、「スカウティング・フォアボーイズ」が出版された1908年(明治41年)には早くも伝えられたように、あっという間に世界各国へ広まった。ボーイスカウトアメリカ連盟が発足したきっかけとなった「ロンドンの霧の中で」起きた有名な話があるので紹介して次に移ろう。

1909年(明治42年)のある秋の夕暮れ、知人を訪ねようとしていた、シカゴの出版業者、ウィリアム・D・ボイスは、道に迷って困っていた。すると一人の少年が現われて、ボイスをその訪ねる家まで親切に案内した。彼は非常に喜んで、アメリカの習慣に従い、お礼の小銭を少年に差し出した。ところが、その少年は、「僕はボーイスカウトですからお礼はいただきません。僕たちスカウトは少なくとも1日に1回はよい行いをするようになっていきます」と言って、3本指の敬礼をして霧の中に消えて行ったのである。

スカウトという、初めて聞く言葉に好奇心をそそられたボイスは、用事を済ませると直ちにボーイスカウト本部を訪ね、ベーデン・パウエル卿にも会った。そしてスカウト運動の精神や組織方法について詳しく聞き、共感を覚えた彼は、この運動をアメリカに広めることを約束し、トランクいっぱい「スカウティング・フォアボーイズ」等の資料や、ユニフォームの見本等を詰め込んで帰国したという。

アメリカには1910年(明治43年)、トムソン・シートンを初代総長とするアメリカ連盟が結成され、わずか3年後には30万人のスカウトが生まれるという急増ぶりであった。

ホ、ベーデン・パウエル卿の生い立ち

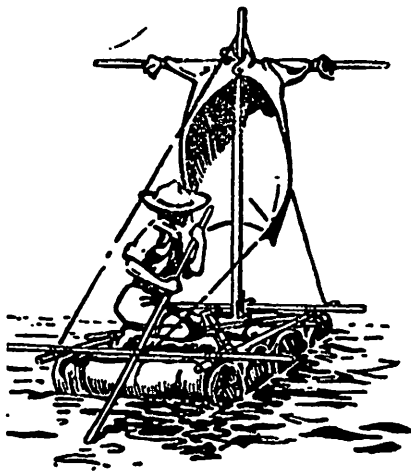
ボーイスカウト運動を起こした、ベーデン・パウエル卿(sir Robert Stephenson Smyth Baden-powell)の生まれたのは、英国が7つの海を制覇し、世にビクトリア時代と言われた、1857年(安政4年)2月22日のロンドンであった。

父はオックスフォード大学の教授で、母は父にとっては3度目の妻であったので、パウエル卿は、父にとっては12番目の男の子、母にとっては9番目の男の子であった。

1876年(明治9年)、19歳の時、陸軍士官特別任用試験を受けて、718名中5番の成績で合格、軍人生活の道を歩み、インド・ルクナウ駐とんの騎兵第13連隊に赴任し、翌年20歳で少尉に任官した。21歳の時には斥候術優等証を、その翌年には小銃射撃優等証を得るなど、模範的青年将校として、人生の大半をインドとアフリカで過ごした。

この長い軍隊生活、とりわけ自分の斥候術や、外地生活で得た体験を通じて、ベーデン・パウエル卿は、部下の兵士を訓練する方法について、今まで試みられたことのない新方法について研究していた。

へ、ボーイスカウト運動を起こす動機となった体験



パウエル卿の自筆のさし絵、自分のコートで簡易帆かけ舟とする。

敵地にはいって敵情を偵察し、これを上官に報告する斥候は、常に機敏で、どんな危険に遭っても負けない胆力を持たねばならない。他のいかなる兵種にも勝る体力、精神を要する。入隊して来た青年にどうして早く、能率よく、この心と体を持たせることができるか、ベーデン・パウエル卿は部下になった新兵に対し、自分の考案した訓練方法を試してみたが、ここで現在のボーイスカウト訓練の基礎である、班組織、進歩制度などが試みられたわけである。

これらの経験や、講話のかずかずをまとめ「斥候の手引」と題する兵書にして、本国に送付したのは1899年(明治32年)のことであった。この兵書がイギリスで出版されたところ、多くの青少年が買い求めるという、パウエル卿の想像もしなかったことが起こったのであった。これが前述した、「少年のための斥候法」の本の、原典となったのである。

ベーデン・パウエル卿にとって、ボーイスカウト運動を起こす動機となったもの

の一つに、ボーア戦争における少年たちの活躍があったと言われている。

ボーア戦争というのは、1899年(明治32年)、南アフリカのトランスバル共和国とイギリスの間で起こった戦争で、イギリスが同国の合併を宣言したため長期化し、ボーア側数万のゲリラがしつこく抵抗、英軍に降伏するまで2年7カ月を要したという。

この時彼は大佐で、メフェキングの町(周囲5マイル、人口1700人)の駐とん軍隊長の任にあったが、多数の敵兵に包囲され、少ない守備兵で苦戦の連続であった。彼はふと、正規兵の足りない力を補うために、現地生まれのイギリス少年たちを活動させてみようと考えた。そこで9歳以上の少年18人を集めて見習隊を結成し、制服を与えて訓練を始めてみた。ところが少年たちはそろって快活で、順応性があり、たちまち有力な1隊となった。伝令、見はり、輸送等の任務はこの見習隊が代ってすることになり、第一線に兵力を増すことができ、実に217日間という長期ろう城によく耐えて援軍を迎え、勝利を得ることができたという。

前もって準備しておけば、少年でもりっぱに国に尽すことができる。また少年というものは、これを信頼するならば、大人の想像を越えた大任を果すことができる。メフェキングの守備戦に勝ち抜いたバーデン・パウエル卿は、深く少年を愛し、少年に期待し、少年のため半生を捧げる決心をしたのであった。